

2017.7

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

7 号

第39巻
No.336



トウキ *Angelica acutiloba* Kitagawa (セリ科 *Umbelliferae*)

生 薬

トウキ（当帰） 晩秋、雪が降りだす前に掘上げ、葉を束ねて雨のかからない、風通しの良い所に吊るして約1～2ヶ月乾燥した後、葉を切り落とし、水洗後湯通しする。根を揉んで土などを落とし、風通しの良い所に並べ再び乾燥する。

成 分

精油：ligustilide, butylidene phthalide, butylphthalide, sedoannic acid lactone, safrole, isosafrole, bergapten, *p*-cymene 等。ポリアセチル化合物：falcarinol, falcarindiol, falcarinolone、クマリン類：scopoletin, umbelliferone など。

効 能

主として漢方処方用薬として婦人薬、冷え性、保健強壮、精神神経用薬、尿路疾患などとみなされる処方に配合される。葉を浴湯料に。



生薬 トウキ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



トウキは古来より日本、中国、朝鮮で生薬として使われていますが、それぞれ原植物が異なります。中国ではカラトウキ (*A. sinensis*) の根が、朝鮮ではオニノダケ (*A. gigas*) の根が使われています。

第十七改正日本薬局方にはトウキとホッカイトウキ (var. *sugiyamae*) が規定されています。トウキはミヤマトウキ (var. *iwatensis*) から栽培化されたものと考えられ、17世紀には山城や大和で栽培されるようになりました。根は太く短く、多数の側根をつけます。長く赤紫色の葉柄をもった葉は互生し、1 - 2回3出羽状複葉で小葉は2 - 3深裂し、裂片は披針形で重鋸歯縁、葉面は濃緑色で艶があり、裏面は淡緑色で葉脈が赤紫色を呈します。

栽培した場合播種から3年目の初夏に花茎を上げ、高さ40 - 90cm、茎頂に多数の白い小花を複散形花序に咲かせ、夏に長楕円形の双懸果を実らせます。花茎の上がない2年目で根を収穫しますが、成長が早いと2年目で花茎を上げ、果実が実ると株ごと枯死し根の収穫ができなくなります。ホッカイトウキはトウキとエゾノヨロイグサ (*A. anomala*) との自然交配種ともいわれ、主に北海道で栽培されています。主根が太く長く側根は少なく、草丈が高く、葉柄は緑色で小羽片の幅は広い変種で、2年目で花茎を上げることはほとんどありません。

トウキが日本の古文献に登場するのは『出雲風土記』(733)の神門郡と飯石郡の山野、おおよそ全ての山野にある草木の項に当帰と記されています。『延喜式』(927)の典薬寮の諸司年料雑薬にも14国から計155斤が献納されています。この頃の本草書『本草和名』(918)には「一名山蕪」など漢名を列挙した後、「和名、也末世利、一名宇末世利、一名加波佐久」、『和名抄』(931 - 937)にも「本草云当帰、和名夜末世里、一云於保世里、又云宇萬世里」と和名が記され、国内の自生種であったことが分かります。江戸時代に入ると『本草辨疑』(1681)に「今、薬家の者は山城、大和にこれを多く作り出す」とあり、前にも述べたように栽培が始まったことが記され、現在でも奈良県に大和当帰の名で栽培が残っていますが、京都山城の栽培は20世紀に入るところから衰退し、現在では生産が見られません。『大和本草』(1709)や『本草綱目啓蒙』(1803)には大和、山城、伊吹や越後、丹後、仙台からも供給されていた時期があったことが記されています。

中国での歴史は古く、『神農本草経』の中品に収載される重要な生薬であり、陶弘景(456 - 536)は「今は隴西(甘肅省)、四陽、黒水(甘肅省)の当帰が肉多く、枝少く気が香しい。これを馬尾当帰という。西川北部の当帰は根枝が多くて細い。歴陽(安徽省)に産するものは色が白く、気、味薄くして比較にならぬ。草当帰と呼んでいる。これはよくよく上記の当帰が欠乏した場合にだけ用いる」と述べ、宋の陳承は『重広補注神農本草経并図経』(1092)に「当帰は妊婦、産後の悪血上衝を活して咄嗟に効を挙げ、気血昏乱にはこれを服すれば直ちに安定する。よく気血をして各々帰する所あらしめるものだ。恐らく当帰なる名称はここから出たものに相違あるまい」と薬効から命名されたと言い、李時珍(1518 - 1593)も「古人は、妻を娶るは胤を嗣ぐためとした。当帰は血を調える夫人の要薬で、そこに夫を思う(帰嫁の帰に就く)の意味があるところから当帰なる名称となったのだ」と言い、やはり薬効顕著なことから名付けられたとしています。(村上守一 記)